

## 汝、星を盗むなかれ 作・風間銀灰

### 注意事項

著作権は放棄しておりません。  
二重配布、作品の無断借用等をご遠慮ください。  
本作品は、ブログにて連載したものを編集し、掲載しています。

街はもうさっさとクリスマスムードらしいが、私の研究室ではあまり関係ない。それでも、授業内容はクリスマスが舞台のミステリについて扱うか、と私はあくびをしながら考えた。

もうおなじみの方もいらっしゃると思うが、私は某大学で、英米文学専門の名ばかりの助教授をしている。シャレのつもりで開講した“クラシックミステリ史”の授業でロクな目に合っていない（他の授業でもロクな目には合っていないが）、不幸な中年男である。口の悪い友人たちは、若くて美人の女房をもらった天罰だ、と言っている。そうかもしれない。

さて次回の授業内容は、がちょうが青い宝石を飲み込んだ例の話にするか、ともう一度あくびをしたところへ、ふいに誰かが研究室の扉を開けた。「不在」札を出しておけばよかったと激しく後悔した。

入ってきたのは、いつものパターンである学生たちより、ある意味もっと質の悪い相手だった。学長が入ってきたのである。何故学長がわざわざ？と思われる読者もいるかもしれないが、彼は私の学生時代からの友人で（よく一緒に授業をさぼってはパチンコに行ったものだ）、どういう手を使ったのか、理事長の娘と結婚して、学長におさまったというちゃっかりした男だ。その彼が、暗い顔をして入ってきたので、「飲みにいこ〜」なんて話でない見当はついた。

さては、舅である理事長に、「英文科のアイツは使えんから、クビにしてこい」とでも言われたのだろうか、と、

私まで暗い顔になっていると、彼が突然口を開いた。「おまえ、この頃、いくつか事件を解決したそうだな」それを聞いて私は困惑した。解決したというより、巻き込まれてしまったというのが正しい。「頼む、この事件も解決してくれっ」

「いったい何の話だ？まあ落ち着け」私はとりあえず、学長に椅子と番茶とポテトチップスをすすめた。いきなり説明もなく結論を言うのが、この男の昔からの悪いクセだ。

「実は」彼は、口いっぱいポテチを頬張りながら話し始めた。「大講堂の、例のクリスマスツリーの話なんだが」例のクリスマスツリーとは、留学生として我が校に通っている、小国だがやたらに金持ちな、某国の閣僚の息子が寄付したものだった。とにかく電飾が激しく、やたらに派手なのだが、そのうえ金もやたらにかかっていた。何せ、てっぺんに飾ってある星が、純金なのである。

「それで？」私は尋ねた。「ツリーの星が、盗まれたとも言うんじゃないな」すると、学長は、口をぽかんと開けて呟いた。

「そうなんだ、何故わかった？」「何だと！」私は驚いた。私の冗談で言うことは、いつもシャレにならないらしい。

「だいたい、あんなところからどうやって盗めるというんだ」

ここでツリーの位置について説明しておく、よりによって講堂の中央通路のど真ん中にでん、と立っているのだ。邪魔である。しかもやたらにでかいので、飾り付けは梯子では足りず、わざわざ足場を組んでやったのである。金持ちの考えることは、いまいちわからない。

「そもそもどうして発覚したんだ」学長の話によると、今朝方、見回りの警備員が、床に星が落ちているのを見つけた。拾い上げてみると、それはやたらに軽かった。紙で作ったニセモノとすり替えられていたのである。

「それなら警察の仕事だろう。ここへ来てどーする」

「いや、それがな...」学長は説明を続けた。

「星を設置したのは、例の留学生自身なんだ。  
で、彼が、警察を呼んだらまず自分が疑われるであろう、  
こんな不名誉な話はない、と言ってごねだした。  
確かに、チャンスがあるとしたら彼だけなんだ。  
だが、彼は決してやっていない、と言っている」  
「信じる根拠は？」  
「だって何の意味がある？  
彼自身金持ちだし、自分の星を自分で盗って何か得に  
なるのか？」  
「つまり、機会はあるが動機はないということか」  
「そうだ...それに、警察沙汰になったら、彼の親からの  
寄付は、かなり減ることになってしまう」  
「結局その問題か」  
「学校経営は大変なんだぞ。な、頼む、なんとか彼以外  
でもチャンスがあることを立証してくれないか。そうすれ  
ば、彼も警察を呼ぶことに反対しないだろう」

仕方がない。  
私は溜息をついていくつかの質問を始めた。  
「防犯カメラの映像は？ それに、警備会社とも契約して  
いて、侵入者が居れば、警報が鳴るだろう？」  
「防犯カメラには、何も異状は映っていなかった。警報も  
鳴っていない」  
「それでは話にならないじゃないか」  
「ただ、防犯カメラは、テープ節約のために、二十四時間  
異状事態がなければ、オールリセットになって繰り返し使  
われる」  
「ヘンなところをケチったもんだな」

と、いうことは、ツリーが設置されたのが三日前だから、  
今朝方から二十四時間分を引いた時間のみが、犯行可  
能？ということになる。しかし、警報も鳴っていないとい  
うことは...

「第一発見者の警備員は？」  
「長く勤めている、信頼できる者だ。  
しかも発見時すぐ連絡してきたから、隠す間もなかった  
に違いない」

やれやれ。これでは、結局留学生に戻ってしまうではな  
いか。私は番茶をすすって、溜息をついた。しかも彼に  
は動機がない。と、なると...。八方塞がりだ。

「駄目か...」  
学長はがっくりと肩を落とした。  
「まあおまえに期待したのが間違いだったかな」

こう言われると、温厚な私でもさすがに腹が立つ。  
もう一度がぶりと番茶を飲むと、私は少々ムキになって  
考え出した。そうだ。日中は、学生の出入りがあるから、  
警報装置は切ってある。例えば、学生に紛れて講堂に  
入り、何か仕掛けをするなどはどうだろう。  
だが、宝石なんかではなく、重たい純金である。  
落下でもしたら、すぐわかってしまう。しかも昼間は人目  
がたくさんある。必ず誰かの目につくだろう。  
「とりあえず、現場に行ってみよう」  
私は提案した。

大講堂に着くと、出入口を警備員が固めていた。  
幸い今日はここで授業はないが、早期解決しないと、瞬  
く間に話は広まるだろう。開いた扉からツリーを見たが、  
中に入るのはやめておいた。もし警察の調べが入った  
ときに、私の足跡で話がややこしくなることは避けたい。  
確かにてっぺんの星がなくなっている。第一発見者の  
警備員が、落ちていた紙の星を見せてくれた。それは、  
立体の星型に金色の折り紙を貼りつけただけの、お粗  
末なものだった。指紋を付けないよう、慎重に扱った。  
こんなに軽いのでは、飾り付けの前にすり替えてもバレ  
てしまうだろう。大講堂の入り口で考え込んでいても仕  
方がないので、次に防犯カメラの映像を見せてもらうこと  
にした。「紙の星」が落ちたのが、昨日の何時頃だったの  
か、知りたかったからだ。

防犯センターで映像を見てみると、明け方四時頃に偽物  
の星は落ちていたことが判明した。特に何かがあって  
落ちたわけではないらしい。と、いうことは、このテープ  
が回るより以前に、既にすり替えられていたことになる。  
ツリーが飾られてから三日、夜以外は絶えず人の出入り  
があった。その全員に機会はなくはないが、同時に人  
目につきやすいということか。これは前にも考えた。  
だが一歩考えを進めると、ということつまり、たとえ純  
金の星をてっぺんから外すことには成功しても、そう簡  
単に持ち出せるとは思えない。すなわち、星はまだ、あ  
の大講堂のどこかにある可能性がある。  
「よし、引き返すぞ、大講堂に」  
学長は目を白黒させながらついてきた。  
そして大講堂の近くまで来ると、背後からお馴染みの声  
がした。

「セーンセ、何してるんスカ」

イヤな予感がして振り返ると、案の定鳴戸と大海原と、そして楠が立っていた。鳴戸と大海原は、理工学部のクセに、わざわざ文学部の「クラシックミステリ史」を取っているミステリマニアである。体型は凸凹コンビだが、二人ともたいそう電気街が似合う男だ。楠は国文科の女子学生で、いわゆる“不思議系少女”である。大概の不思議娘は、不思議系を演じているものだが、この娘の恐ろしいところは、それが天然だということだ。

「大講堂のツリーを見に来たんですけどお、警備員さんが入れてくれないんです」

いつもは、私をクラシックミステリ史の授業で散々やっつけているこの連中に会っても、嬉しくも何ともないが、今ばかりは人手が欲しいのでナイスタイミングだった。「ちょうどいいところに来た。訳は後で話す、とにかく、この大講堂の中で、星を探すのを手伝ってくれっ」

そんな訳で、私と学長、警備員の人たち、そして鳴戸と大海原と楠が、大講堂の搜索をすることとなった。

「お星さま探せばいいんですね〜♪」

楠の、ロマンチックですう、という言葉を見無視して、調べに入った。まず台座周辺を探したが、やはりある様子はない。そこで、手分けして構内の座席の下・机の中を、重点的に調べることにした。大がかりな清掃が入るのは週に二回で、星がなくなってからまだ業者が入っていないから、まだ隠してある可能性はありそうだった。「でも、もう一昨日くらいに回収してしまっているんじゃないか？」

学長がぼやいたが、犯人が防犯カメラを意識しているとすると(オールリセットになるのを知っているのは学長と警備員だけだ)、必ず大人数の授業中に紛れて、回収に来るに違いない。人数が少ないと、目立って映るからだ。そして、ツリー設置から三日、休講などで、ここでまだ大きな授業はない。

しかし、目当ての物はなかなか見つからなかった。出てくるのは、紙ゴミ、ペットボトル、忘れ物らしいボールペン、す〇きよ君ストラップなど、微妙なものばかりだった。学生のモラルの低さが嘆かわしい。忘れ物はともかく、ゴミはゴミ箱に捨てるべきだろう。皆が疲れてきて、諦めムードと、そして私への無言の抗議の空気がひしひしと迫ってきた中で、楠だけは相変わらず元気だった。

そして、しばらくして、彼女の声が響いた。

「ありましたあ！」

「何だ？今度は弁当箱でも見つけたのか？」

先ほど弁当の蓋を見つけたのだ。

「違いますう、お星さまですう。重いですよ〜」

「何だって！」

それは、コンビニ袋に入れられて、机の奥の上部にガムテープで留めてあった。ちょうど、左手を延ばせば届くが、膝や足には全く当たらない、巧みな位置だった。

「やったっスね！」

「よかったよかったっ」

学長はとても喜んでいたが、ふとまた顔を曇らせて呟いた。

「だが、犯人はいったい誰なんだ？」

しかもどうやって？まだその説明がついていない」

「例の留学生が犯人でないとすると、あと考えられる可能性は少ない」

私はそう答えた。

「え？わかっているのか？それなら…」

そのとき、鳴戸と大海原が口をはさんだ。

「わっ、ちょっと待ってほしいっス」

「俺たちにも一応推理させてくださいよ」

「あのなあ」私は呆れて言った。

「今はそれどころではないのだぞ」

「まあそうおっしゃらず。こんなのはどうです？」

犯人は、よく訓練したハムスターなんかを使って、

ツリーに登らせて、紙の星と入れ替えた」

大海原が言った。すると鳴戸が反論した。

「ハムスターじゃ金の星は重くてムリっスよ。それより」

「それより、災害救助用などのロボットを改造して、木に登らせたというのはどうスカ？」

「それじゃ大海原クンの意見と変わらないですう」

「じゃ楠さんは、別の考えあるんスカ？」

「ないですう」

ここで鳴戸と大海原は、漫画のようにズッコケた。

「じゃ、じゃあやはり真打ちの、センスの意見をお伺いするッス…」

私は咳払いをして、始めた。

「このような場合、最も単純なことが回答の場合が多い。機会がある人間について考えるとよい」

「えっ、じゃあやっぱり持ち主の自作自演…？」

「違う。それならば講堂内に隠す必要はないだろう」

「でも、他に誰が...」

「忘れていた犯人候補がいる」

「そんな者がいるのか？」

「だいいち、設置当日は、出入りの際に設置する業者だっ  
て簡単な身体検査を受けたのだぞ」

学長が呟いた。

「だが私にとっては、それで余計に何もかもつじつまが合  
う。」

「だから講堂内に隠していかねばならなかったのだ」

「だが、星をてっぺんに付けたのは、持ち主自身だ。その  
前にすり替えることは不可能だ」

「その後なら可能だ」

「どうしてだ？無理だ、星を付けるのが最後の作業だっ  
たのだから」

「本当に最後かな？」

「他に何かがある？」

「足場を外す作業が残っているだろう」

私の言葉に、全員しばし沈黙し、それから大海原が叫ん  
だ。

「あっ、そうか！足場を外していくときに...」

「そう、足場は上から順に外していきだろ？その際にす  
り替えたのだ」

学長はしばし呆然としていた。

そしてようやく口がきけるようになると、嬉しそうに言った。

「ありがとう、親友。やはり私が見込んだ男だけのことは  
ある」

全く調子のいい奴だ。

おそらく理事長の娘もこの手でおとしたのだろう。

「では警察に、設置業者を調べてもらうよう言えば、  
その中に犯人がいるという訳だな」

ではさっそく警察に連絡を、と行こうとする彼に、  
鳴戸がストップをかけた。

「ね、学長センス、ちょっと待ってくださいよ。」

警察が動いたら、犯人逃げちゃうかもしれないじゃないス  
か。

...それより、犯人はここへ必ず星を取りに来るはずッス  
よね。

そのときに捕まえちゃうってのはどうスか？学校の宣伝  
にもなるかもしれないし」

ムチャを言う男だ。星も戻ったし、おとなしく警察に任せ  
た方がよいではないか。

しかし、なんと学長は考え込みました。

考え込んだ学長の出した結論は、なんとゴーサインだっ  
た。そういえば、昔から無謀な賭け方をする男だった。  
しかも、その賭に必ず勝つのだ。ただし、彼は条件を付  
けた。警察には話して、私服警官に張り込んでもらう。  
学生たちを危険から守る義務が学長にはある。万が一  
逆上した犯人が、暴れ出さないとも限らない。

「でもお」ここで楠が口をはさんだ。

「紙のお星さま落ちちゃったんですから、犯人がここに来  
たら、犯行発覚しちゃったのに気付いちゃいますよね。」

そしたら、すぐ逃げちゃうんじゃないんですかあ？」

そのことをすっかり忘れていた。

今度は全員で、うーんと考え込んだ。大勢出入りする授  
業は明日だ。明日までに足場を組んで、何事もなかつ  
たかのような状態に戻すことなど、不可能だ。

すると、学長が口を開いた。

「では明日の大講堂での授業は、私がしよう」

明日の授業は、「環境問題を考える」というテーマの授業  
にし、それにかこつけて照明を落として、ツリーのてっ  
ぺんを見えにくくするというのが学長の提案だった。

無論うまく行くかはいちかばちかだったが、他に名案もな  
いのでその方法で行くこととなった。内密に警察が呼ば  
れて、証拠品として、紙の星と金の星を持っていった。  
件の留学生には、星が無事発見されたこと、犯人も絞り  
込めたことが伝えられた。さあ私にできることもここまで  
だ。

あとは学長と私服警官と警備員に任せて引き上げよう。  
そう思って帰ろうとしたら、学長に呼び止められてしまっ  
た。

「もちろん明日も手伝ってくれるよな」

「断るっ」

相手が学長といえど私も断るときはきっぱりと断るのだ。

「授業の準備がある」

すると、学長が小声で囁いた。

「ボーナス増やそう」

「手伝おう」

こうして、私も学長の授業に協力するという形で、参加す  
ることになった。ボーナスが増えれば、妻へのクリスマス

プレゼントもグレードアップできるというものだ。

例の机には、適当に重い金属を詰めたコンビニ袋が、元のように貼り付けられた。そして、その席をさりげなく空け、周囲に私服警官が学生風の服装をして座った。鳴戸たちも、よせばいいのに近くに座ることに決めていた。

そして、出入口には教官と警備員をそれぞれ配置することにした。途中退出した者の中に、学生以外の者が混じっていないか調べるためだ。ここにも危険に備えて私服警官が待機した。授業開始十分前となり、講堂がぱらぱら学生で埋まってきた。

「本当に、来るかな？」

学長が囁いた。何を今さら、とも思ったが、ボーナスの件があるので黙っていた。

すると、例の席に、誰かが座った。足元の間接照明しか点いていないので、何者かはよくわからない。

その席に座った者は、事情を知らない学生かもしれない。だが、私の経験では、空席がたくさんある場合、学生は比較的人口密度の少ないところを選んで座る。なのにわざわざ、私服警官やら、鳴戸たちやらでやや密度が高いところに座ったということは…。

「来たぞ」

私は囁いた。学長はうなずき、そして講義を始めた。

「さて諸君。今日何故照明を落としたのか、不思議に思う人もいるでしょう。本日私は、今の世の中、特に都会において忘れ去られた、闇というものを味わってもらい、それを通して電力の与える環境への影響を、考えてもらおうと思っております…」

私はマイクの調整をするふりをしながら、例の席の方を見た。よく見えないが、何やら少し動いているような気配がある。机の奥を探っているのかもしれない。

そして、その人物は、そっと立ち上がって出口の方へ向かった。

その人物の後を、私服警官らしい者がさりげなく追っていった。よせばいいのに、鳴戸と大海原が、さらにその後を追っていった。こんな暗がりでも、体型であの二人はすぐわかる。学長が私に合図をして、照明のスイッチを入れさせた。講堂中が、一気に明るくなった。学生たちの、目を眩しそうに細める顔が見える。

そして、例の席は無論空だった。そのとき、外から「逃げたぞっ」「待て」という声が響いてきた。あんなに嚴重に

していたのに、逃げられてしまったのだろうか。

学生たちがざわめきだし、何人かが立ち上がろうとしたので、学長が

「静かに！授業中ですよ！」

と注意をした。私はその場を彼に任せ、少々不安ではあったが、講堂の外へ様子を見に行くことにした。

ところが、出てみると、ちょうど犯人らしい男が手錠をかけられているところだった。

はて、では、先ほどの声は…？

顔中が疑問符になっていた私に、大海原が説明してくれた。

「教官が、出てきた男に学生証の提示を求めたら、そいつ、忘れまして答えたんです。では学生番号を言いなさい、って言われたら、いきなり逃げ出して…」

「で、警官たちも慌てて後を追ったんすけれど」

鳴戸が説明を引き継いだ。

「そいつ逃げ足早くて、あっという間に非常階段の方へ行っちゃったんです。でもそこで、超越(こしごえ)と鉢合わせしたんすよ」

そこで私はその場に超越がいるのに初めて気が付いた。彼は、やはりクラシックミステリ史を受講している史学科の学生だ。考古学と武道とミステリを愛する、妙に年寄りくさい男である。

「授業に遅刻して焦っていたので」

今度は超越本人が説明を引き継いだ。

「近道しようとして非常階段の方から上がってきたんです。

そしたら、向こうから駆け降りてくる奴がいて。

ぶつかりそうになったら、急に殴りかかってきて」

超越は説明を続けた。

「それで、殴りかかってきたもんだから、反射的に反撃してしまっただけです」

犯人は、よりによって空手をやっている超越と鉢合わせしてしまったのだ。紙の星が落ちたことといい、悪いことはできないものだ。

「そしたら奴はのびてしまって。しまった、やりすぎたかなと焦っていたら、人が来て、鳴戸たちが事情を説明してくれたというわけです。奴さん、窃盗犯だったんですね」

なるほどな、と私はほっと安堵の息を吐いた。

犯人も捕まったし、ケガ人も(犯人以外は)出ずに済んだし、盗品も無事戻ったし、今回はまあ我々の方が運がよ

かったのだろう。

その後の警察の調べで、犯人は様々な余罪がある常習窃盗犯であることが判明した。主に宝石店を狙うのが専門だったらしいが、今回はたまたまうちの学校のツリーに目を付けたらしい。

こうして事件は解決した。

例の金持ち留学生とその父親はとても喜んで、多額の寄付と、そして何故か、バカでかいブロンズのライオン像を学校に寄贈した。やはり金持ちの考えることはわからない。私にも同じ像を贈ると言われたが、慎んでお断りした。ツリーの星は、また元の位置に飾られた。ただし、今度は防犯カメラがレベルアップすることになり、警備も強化された。学長は今回事件をうまくさばいたことで、舅である理事長におおいに褒められ、学校の知名度も上がったようだった。私はといえば、今回の騒ぎに加われなかった毒舌女子学生田沢に授業で散々やっつけられだうえ、約束のボーナスは百円アップという結果だった。学長を詐欺で訴えたいくらいだ。アップはアップだから、訴えても勝てなからうが。まあ妻が褒めてくれたし、よしとするか。何と言っても、クリスマスは許しの季節なのだから。

—了—